

効果的な支援であるために

～免許外教員の美術科指導の自立を目指して～

美術免許外教科専門支援員 氏次 容子

1 はじめに

令和5年度は、支援する免許外教員のほとんどが教職経験の浅い教員であった。教職経験が浅く美術指導も初めての教員にとってより効果的な支援となるように、支援開始前のガイダンスで、校務分掌や美術指導における困り感や不安、生徒につけたい力等について十分な聞き取りを行った。また美術室の環境（施設設備、教材教具の状況）を確認し、アセスメントをもとに、それぞれの支援プランを練ることから始めた。今年度は、支援目標を「免許外教員の美術指導の自立」とした。

2 支援の内容・方法

(1) 支援を開始するにあたり

今年度の支援対象である免許外教員は若年教員が多かったこともあり、学校ごとに支援計画や支援内容、方法を変え、より個別最適支援を心がけた。指導計画は、大きく二つに分かれた。やりたいことや計画が決まっている学校については、希望や計画に沿って支援していくプランを立てた。指導計画はあるが、それに沿っていない、または指導内容で困っている学校には、本人の経験や希望に合わせながら、同時に生徒が既に学習したことを聞きながら、生徒の発達段階に合わせて指導計画を立てた。

(2) オンライン支援

毎週の支援時間割は免許外教員の希望に沿って作成したが、学校の時期的状況や本人の希望に応じて臨機応変に支援の日時や内容は設定、変更した。支援の事前事後には、必要に応じてグループウェアメッセージでのやり取りを行った。学習資料や参考作品、ワークシートなどはメッセージへの添付や免許外支援用のグーグルクラスルームに投稿し、いつでも自由に取り出して活用できるような環境を作った。

毎回のオンライン支援では、まずは困っていることや質問や相談を聞き、具体的に対応し解決するところから始めた。提供した資料やワークシートの活用の仕方を説明したり、授業展開を分かりやすく簡略にまとめた「授業レシピ」を作り説明、場合によっては実演して見せたり、オンラインを通して一緒に実習したりすることもあった。免許外教員が経験したことのない授業については、めあてや評価はもちろん授業レシピと板書計画を提案した。指導の過程で作品写真が送られてきた際には、それぞれの生徒への声掛けの仕方や、作品への個別指導のポイントを書き込んだ「手板」を作成して送ることもあった。

生徒の前に立つのは免許外教員であり、「美術の教員としての指導の自立」を支援の目標としていた。そのため免許外教員が自信をもって授業に臨めるよう、免許外教員がどこに困るのかを想定し、生徒の力をどう伸ばしたらよいのか、一人一人の生徒にどう声掛けをし、何を指導したらよいのかなど、丁寧に支援を行うことに配慮した。免許外教員にとっても生徒たちにとっても分かりやすく効果的な美術の授業にするために、必要に応じて様々なツールを考案・提供することを続けた。また、学習評価については、教材ごとに何をどう評価すればよいのかなど、観点別評価の具体的な内容や評価項目を明らかにし、生徒一人一人の作品をそれに照らし合わせてどう評価したらよいのかを伝えていった。要望があれば、生徒の作品をオンラインやメール添付で見せてもらいながら一つ一つ解説し、免許外教員が自信をもって評価でき、説明責任も果たせるように支援していった。

(3) 来所支援

夏季休業中等に教育センターで対面での支援を希望する免許外教員が多かった。未経験の教材を中心に、生徒が作品を制作するうえで必要になる技術を習得するためのコツや指導のポイント

について、体験を通して学ぶためである。より強い「実感」として免許外教員自らが経験することの効果の大きさを感じた。

(4) 講習会や講座

教育センター主催「免許教科外の教科教授担任講習会」の実習分野に講師として参加し、参加者の困りごとへの回答、希望に応じる内容での実技講習の実施、必要な資料やワークシートなどの提供の他に、評価についての具体を伝えた。

本年度は、「免許外支援講座」を2回計画した。1回目は平面表現（描画、デザイン、版画、デッサンなど）、2回目は立体表現（木彫、ボックスアートなど）の内容で実施した。休日の講座であったため、参加人数に一抹の不安はあったものの、のべ9名が参加してくれた。講座受講者のアンケートでは、「免許外教員が実際に作品づくりを体験しながら生徒がどこでつまずきやすいのか、その原因や対策、また、指導側はどのような声のかけ方をすると効果的なのかなどの気づきの場になった。」という感想・記述がみられた。

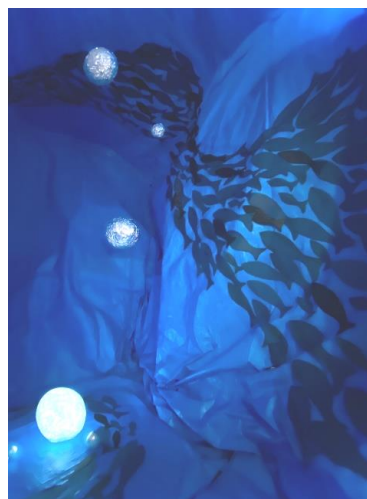
これらの出会いがもとで支援する教員が増えた。何か困りごとがあるときに相談してくる教員もいれば、その後継続支援につながっていった方もいた。毎週定期的にオンライン支援をすることになった学校もあり、当初4校だった継続支援校が年度後半には8校に増えた。中には、週に2回の支援を希望する教員もいた。

(5) 美術館連携授業と交流授業

鑑賞領域の授業支援の一環として、高知県立美術館との連携授業「INSPIRE ART PROJECT」を実施した。鑑賞と表現を切れ間なくつないだ授業形態で、卒業前に学習と仲間づくりの集大成として共同制作に取り組んだ。そして、オンラインで作品をプレゼンテーションしながら他校と交流した。生徒たちは、制作中「このために今学校に来ている」と楽しみにしてくれたり、別室登校の生徒が中心になって取り組んだり、他の生徒たちとの積極的な交流が生まれたという報告を聞くことができた。また、免許外教員自身が「わくわくします」と授業に取り組んでいた。



対面での実習の様子



「INSPIRE ART PROJECT」の作品
テーマ『宇宙』

3 まとめ

今年度の目標は、「免許外教員の美術指導の自立」だったが、実際に昨年度支援した学校が免許外教員の指導で、「こども県展」の大賞や推薦などの個人賞、学校賞を引き続き受賞できたことは本当に嬉しいことだった。今年度の支援は、免許外に加えて教職経験の浅い教員が多かった。教職の道を歩み始めたばかりの若者たちに向けて、エールの気持ちも込めてできるだけ寄り添い、それぞれに合わせて支援内容を組み立てて実施していった。大きな成果は出なくても、美術の楽しさを感じてもらい、美術という教科を通して生徒に関わることを、人を育てることを体験的に学んでほしいと思っていた。支援を行ったほぼ全員の教員の意欲の高まりや成長のスピードが上がることを実感した。様々な高知県の教育の課題を聞く中で、支援した教員からは、頼もしく清々しさを感じた。また、今年度は、免許外教員を横につなぐことも意図的に何度か行った。同じように頑張っている仲間がいることや互いの実践から学ぶこと、助け合うことなど、これも小さな種まきと思っている。少しでもこの事業が高知県で「あたりまえ」に広く周知され、実施されていくことを願って、また新しい出会いの中でそれぞれに応じた効果的な支援を講じていこうと考えている。